

河床材料調査技術

河床材料調査は、河道の土砂管理や護岸整備等に関する重要な資料になるものです。また、近年、台風による河床変動が顕著なことから、河床材料調査の需要が高まっています。当社では、以下の調査方法から、調査目的や現地の河川状況に応じた河床材料調査に対応いたします。

陸上での河床材料調査

日進量は、おおよその平均であり、地点の状況により変動します。



手法	面格子法	線格子法	容積法
メリット	調査が手軽、広範囲のサンプルから評価可能		上層、下層ともに粒径を評価可能
	—	大径の礫でも計測可能	
デメリット	下層の粒径が評価困難		短期間でより多くの地点をこなすのは困難
	粒径が小さい(砂など)場合は計測が困難	—	
日進量・作業員数	5箇所/日、2～3名	5箇所/日、2～3名	3～4箇所/日、4名

水中での河床材料調査

日進量は、地点間距離と潜水深度により大きく変動するため記載しておりません。作業員数に船員は含んでおりません。



手法	ダイバーによる採取		船上から採泥器による採取
	直接採取	柱状採取(VCS)	
メリット	ダイバーが採取するため、必要量を確実に採取可能	柱状での採取が可能	船上から簡易に採取可能
デメリット	費用(ダイバー、備船費用)、安全管理		中径以上の採取は困難
	大径以上の採取は困難	サンプル分取が必要	
作業員数	4名	4～5名	2～3名

その他の調査方法として、ドローンを用いた空撮や河床を撮影した写真からの粒形判読にも対応いたします。

